

が可能となるか。

回答：森岡 範之（歯補2）

今回の5症例における開口量の増加からみると、約20mm程度まで期待できると思われる。しかし、今回述べたように半側全部切除および放射線療法の方法によっては、差が生ずると考える。

演題15 歯周疾患の統計的観察：主訴からみた患者の実態について

- 長田 亮一，阿部 忠一，村上 弘行
牟田 直竹，佐伯 厚夫，渋谷 隆
松丸 健三郎，上野 和之

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

岩手医科大学歯学部附属病院を訪れた外来患者の中で、歯周疾患に関連する症状を主訴として受診した患者（以下主訴患者と略称）について、前回昭和42年度から45年度までの4年間の統計的報告を行った。今回はその後昭和54年度までの9年間について同様な検索を試みたので報告する。

主訴患者の判定は、前回の検索と同様外来の記録から初診時の診断および診療内容を参考として行った。また、調査内容は各年度の newcomers に対する主訴患者の比率、主訴患者の年代別比率および男女別比率、主訴患者の年齢構成、主訴別患者数とその比率、年齢からみた男女差等である。

newcomers に対する主訴患者の比率は前回の4年間の平均 8.8%に対して、今回の9年間の平均では 8.1%とほぼ類似した数値を示していた。しかし、昭和52年度以降は多少減少する傾向を示し、54年度では6%と過去13年間で最も低い数値であった。また、男女差についてみると、実数は女性で多いが、newcomers に対する比では男性の方が多少ながら女性を上回っていた。主訴患者を年代別にみると20代から40代に最も多く、全体の70%を占めており、30代までは女性の比率が高く、40代以降では男性の比率が高かった。

主訴としては前回と同様出血、腫脹、動揺、疼痛の4者が多く、これらで全体の70%を占めていた。またこれら4主訴の過去13年間の変遷をみると出血、腫脹、動揺は多少減少しているのに対して、疼痛の占める割合はむしろ増加する傾向を示していた。また全年代層にはほぼ同様に分布する疼痛を除くと、20才未満では腫脹、20代では出血、30代では腫脹、40代以上では

動揺が最も多く、増齢と共に歯周疾患の進行した症状が主訴となっていることが判明した。男女別では、出血、排膿、口臭は女性に多く、動揺は男性に多かったが、他は男女差はみられなかった。

演題16 予診科を訪れる外来患者の最近の動態について

- 菊池 行記，林 朗，乙部 寿子
千葉 寛子，村上 徳行，松丸 健三郎
上野 和之

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

本学に歯学部が併設されてから15年、今春には第10回目の卒業生が社会に送り出されており、この間に当地域の歯科医療の状況や情勢にも変化がみられている。本学は保険医療機関であるとともに教育機関という特殊な事情を有しており、十分な教育を行うためには、今後の予測も含めて外来患者の実態を把握することが重要である。今回、最近10年間に本学歯科外来を訪れたnewcomers（新患）の動態について検索を試みた。

事務的に初診料を納入する新患総数は45年度（6,975名）から50年度（8,815名）までは増化し、それ以降54年度（6,986名）まで漸次減少している。一方、予診室に登録されている新患数も50年度をピークとして減少の傾向を示すが、52年度以降は、ほぼ一定数を保っている。また、男女比はこの10年間を通じていずれも女性が高く、平均で男性1に対して女性1.32である。

保存、補綴、口腔外科等の教育診療実習と密接な関連を有するいわゆるフリー患者（新患総数から紹介患者や小児歯科および矯正歯科等の患者を除いた患者）の実態を把握するため、4月と10月の平均を月間患者数としてその年度別変動を検索した。その結果、フリー患者数は45年度（362名）から一旦減少し、48年度から増加し、50年度（390名）にピークに達した後、再び大幅な減少傾向を示し、55年度（182名）では50年度の半数以下となっている。フリー患者数の新患総数および予診登録新患数に占める比をみると、前者では45年度（67.0%）から55年度（36.3%）まで直線的な下降を示し、後者では45年度（77.4%）から52年度（70.8%）まではゆるい下降をその後55年度（42.4%）までは急激な下降を示している。また、予診登録新患